

六朝樂府詠注（十八）——「釣竿」三首・「隴頭水」五首——

小川恒男

はしがき

一人で詠注を作成する作業を細々と続けていると、時にひどい勘違いをしてしまうことがあって、前々稿「詠注（十六）」に掲載するはずだった「釣竿」及び「釣竿篇」を紙幅の都合から後回しにしていたのを、「詠注（十七）」に収めるのを失念してしまった。

「詠注（十六）」から『樂府詩集』巻二十一に収める横吹曲辞を読み始めたものの、陳の後主の「隴頭」一首しか取り上げられなかった。「詠注（十七）」には梁元帝蕭繹、劉孝威、車敳、陳後主二首、徐陵、顧野王それぞれの「隴頭水」計七首を収めた。

本稿には、漢魏歌に属する「釣竿」「釣竿篇」を改めて掲載し、漢横吹曲に属する「隴頭水」の続きを収めた。「釣竿」は魏文帝曹丕、梁・沈約、同じく梁・戴暠^{たいこう}の作がそれぞれ一首ずつの計三首。「釣竿篇」は梁・劉孝綽、陳・張正見、隋・李巨仁の作がそれぞれ一首ずつの計三首である。「隴頭水」は陳の謝朓、張正見二首、江総二首の計五首である。

底本はこれまでと同様に中国古典文学基本叢書『樂府

詩集』（中華書局 一九七九）である。

魏・文帝曹丕「釣竿」

【本文及び書き下し】

- | | |
|---------|-----------------------------|
| 1 東越河濟水 | 東のかた河を越え水を済 ^{わた} り |
| 2 遥望大海涯 | 遥かに大海の涯を望む |
| 3 釣竿何珊瑚 | 釣竿 何ぞ珊瑚たる |
| 4 魚尾何篋篋 | 魚尾 何ぞ篋篋たる |
| 5 行路之好者 | 行路の好む者 |
| 6 芳餌欲何為 | 芳餌もて何をか為さんと欲す |

【日本語訳】

- 1 東に向かい黄河を越え川を渡って
- 2 遙か大海原の果てを眺める
- 3 釣り竿はヒュンヒュン
- 4 魚の尾はピチピチ
- 5 道端でわたしに流し目をくれるあの人は
- 6 美味しそうな餌で何をしようというのだろう

【校勘】

○『芸文類聚』巻四十一・『古詩紀』巻二十二
0 「釣竿」、『類聚』作「釣竿行」。

【押韻】

「水」、上声五旨韻。「涯」、上平十三佳韻。「篋」「為」、上平五支韻。上声五旨韻は上平六脂韻と相配関係にあり、支・脂は同用。

【作者】一八七〇二二六。曹操の長子。後漢の献帝から禪譲され三国魏の初代皇帝（在位二二〇～二二六）となった。字は子桓。曹丕は父・曹操、弟・曹植とともに「三曹」と称され、いずれも優れた文学者だった。彼の詩は約四十首が今に伝わるが、父や弟と比べると繊細優美な詩風が際立つ。また文学の様々なジャンルで作品を残しており、彼の「燕歌行」は最も早い時期に作られた七言詩のひとつであり、『典論』は中国で最も古い文学評論に関する著述で、「文章は経国の大業にして、不朽の盛事なり」の一文によってよく知られる。既に散佚しているが曹丕が編纂した『皇覽』はやはり最古の類書とされる。

【語釈】

0 釣竿
「釣竿」漢鼓吹饒歌の一。『樂府詩集』巻十八・鼓吹曲辞三・漢饒歌下・「釣竿」で郭茂倩の題解は崔豹『古今注』を引き、「『釣竿』者、伯常子避仇河浜

為漁者、其妻思之而作也。每至河側輒歌之。後司馬相如作『釣竿詩』、遂伝為樂曲。（『釣竿』は、伯常子 仇を河浜に避けて漁者と為り、其の妻 之れを思ひて作るなり。毎に河側に至れば輒ち之れを歌ふ。後に司馬相如 『釣竿詩』を作り、遂に伝へて樂曲と為す。）と言う。また、同じく巻十六・鼓吹曲辞・漢饒歌古辞の題解には『古今樂録』に「又有『務成』『玄雲』『黃爵』『釣竿』、亦漢曲也。其辞亡。（又た『務成』『玄雲』『黃爵』『釣竿』有り、亦た漢曲なり。其の辞 亡ぶ。）とあるのを引く。余冠英『三曹詩選』（作家出版社 一九五六）は「但從崔豹『古今注』的説明知道那是写夫婦愛情的。本篇也是情歌。（だが、崔豹『古今注』の説に従えばそれ（『釣竿』古辞）が夫婦の愛情を描いたものであることが分かる。この篇もやはり情詩である。）」と述べ、「在歌謡裏釣魚常常做男女求偶的象徵隱語。（歌謡では魚釣りがしばしば男女が恋人を求めることのシンボルや隱語となる。）」と歌謡からの影響を受けての作であるとする。易健賢訳注『魏文帝集全訳』（貴州人民出版社 一九九八）は、「本詩中『行路之好者、芳餌欲何為』的反問、正是説明芳餌誘惑所隱藏的危險性。（この詩の『行路の好む者、芳餌もて 何をか為さんと欲す』という反問は、まさしく芳餌という誘惑が隠し持つ危険性を明らかにしている。）」とこの詩に寓意があることを強調する。ここでは、何らかの寓意があるにしても、表現

上は漢代の民間歌謡を踏まえる作として訳出した。

1 東越河濟水 2 遙望大海涯

「越河濟水」黄河を越え、川を渡って海に向かう。濟、わたるの意。

「遙望」遠くに眺める。「古詩十九首」(『文選』卷二十九)其十三に「驅車上東門、遙望郭北墓(車を上東門に駆り、遙かに望む 郭北の墓)」。

「大海涯」大海原の水辺。涯は浜の意。

3 釣竿何珊瑚 4 魚尾何筵篋

「珊瑚」玉や金属が発する澄んだ音を形容するが、ここは釣り糸を投じる音を表す。二句、漢・無名氏「白頭吟」(『玉台』卷一)に「竹竿何嫋嫋、魚尾何萋萋(竹竿 何ぞ嫋嫋たる、魚尾 何ぞ萋萋たる)」とある。嫋嫋はたおやかな様。萋萋、『樂府詩集』卷四十一は「萋萋」に作る。

「筵篋」魚が尾を振って躍り上がる様。右の語釈参照。

5 行路之好者 6 芳餌欲何為

「行路」道路。『詩經』小雅・苑柳に「有苑者柳、不尚息焉(苑たる柳有り、息ふを尚はざらんや)」とあり、その「鄭箋」に「有苑然枝葉茂盛之柳、行路之人豈有不庶幾欲就之止息乎。(苑然として 枝葉 茂盛するの柳有り、行路の人 豈に有不欲之れに就きて止息するを庶幾ひて欲せざる有らんや。)」

と見える。

「好者」好意を寄せてくれる人。易健賢前掲書は「好事者」の意として、「喻不辭辛苦奔波逐利的人。(勞苦をいとわず慌ただしく駆け回って利益を追い求める人を喻える。)」とする。

「芳餌」よい餌。後の例だが、晋・傅咸「贈何劭王濟詩」(『文選』卷二十五)「臨川靡芳餌、何為守空坻(川に臨んで芳餌靡く、何為れぞ 空坻を守らん)」と。李善注は『吳越春秋』卷五に「大夫種曰、『…、深川之魚、死於芳餌。(大夫種 曰く、『…、深川の魚は、芳餌に死す。』)』とあるのを引く。現行の『吳越春秋』は「深川」を「深泉」に作る。

梁・沈約「釣竿」

【本文及び書き下し】

- | | | |
|---------|-----|---------------|
| 1 桂舟既容与 | 桂舟 | 既に容与として |
| 2 緑浦復回紆 | 緑浦 | 復た回紆す |
| 3 輕糸動弱菱 | 輕糸 | 弱菱を動かし |
| 4 微楫起单鳧 | 微楫 | 单鳧を起たしむ |
| 5 扣舷忘日暮 | 舷を扣 | 日を暮るるを忘れ |
| 6 卒歳以為娛 | 歳を卒 | ふるまででて娛しみて為さん |

【日本語訳】

- 1 美しい舟がゆったりと水面をたゆたい
- 2 緑色の水辺が曲がりくねっている
- 3 細い釣り糸が柔らかなヒシの葉を動かし

- 4 小さな舟が一羽だけのカ리를飛び立たせる
- 5 船端を叩いて歌い、日が暮れるのを忘れ
- 6 一年が終わるまでずっと心の楽しみにしよう

【校勘】

○『芸文類聚』卷四十一・『古詩紀』卷八十二
0 「釣竿」、『類聚』作「釣竿行」。

【押韻】

「紆」「鳧」上平十虞韻。「娛」、上平十一模韻。虞・模同用。

【作者】四四一〜五一三。字は休文。吳興郡武康(浙江省)の人。宋・斉・梁の三代に仕え、斉梁文壇の第一人者となった。沈氏は武官系の寒門であったが、彼は学問を修めその文才によって、斉の竟陵王蕭子良の文学サロンで重きをなし、「竟陵の八友」(沈約・蕭衍・王融・范雲・謝朓・任昉・陸・蕭琛)のひとりに数えられた。謝朓・王融・沈約等が中心となって創出した詩風は、年号によって「永明体」と称される。それは典故、対句、声律などを駆使し、より洗練された形式美を追求するものであったが、とりわけ沈約の「四声八病説」は中国語の四声を効果的に組み合わせることによって韻律の美しさを生み出そうとする試みであって、後の近体詩成立に大きく寄与した。蕭衍(梁の武帝)の梁王朝実現に協力し、その尚書令まで上り、

建昌県侯に封ぜられた。『宋書』を著した歴史家でもあり、仏教信者としても知られる。

【語釈】

1 桂舟既容与 2 緑浦復回紆

「桂舟」桂の木で作った舟。後に舟の美称として用いられる。桂は日本のカツラとは異なり、クスノキ科の常緑樹。語は『楚辞』九歌・湘君に「美要眇兮宜修、沛吾乘兮桂舟(美 要眇として 修るに宜しく、沛として 吾 桂舟に乗らん)」と見え、斉・謝朓「江上曲」に「千里既相許、桂舟復容与(千里 既に相ひ許し、桂舟 復た容与たり)」と類似句がある。

「容与」波のまにまにゆったりと漂う様。双声。『楚辞』九章・涉江に「船容与而不進兮、淹回水而疑滯(船は容与として進まず、回水に淹まりて疑滯す)」と。

「緑浦」緑色の水辺。六朝詩では他の用例が見当たらない。

「回紆」曲がりくねる。紆回を押韻のために転倒させた。漢・班彪「北征賦」(『文選』卷九)に「涉長路之縣縣兮、遠紆回以繆流。(長路の縣縣たるを涉り、遠く紆回して以て繆流す。)」と。

3 輕糸動弱菱 4 微楫起单鳧

「輕糸」細い糸。ここは釣り糸のこと。斉・謝朓「在

郡臥病呈沈尚書」（『文選』卷二十六）に「夏李沈朱実、秋藕折輕糸（夏李 朱実を沈め、秋藕 輕糸を折る）」と。

「弱芰」柔らかなヒシ。『楚辞』招魂（宋玉）に「芙蓉始發、雜芰荷些。（芙蓉 始めて發き、芰荷を雜ふ。）」とあり、王逸注に「芰、菱也。」

「微楫」小さな舟。楫は舟を漕ぐ櫂、転じて舟をいう。六朝詩では他の用例は見当たらない。

「單鳧」群れから離れてしまった一羽のカリ。梁・簡文帝蕭綱に「詠單鳧詩」がある。「李陵録別詩二十一首」其十一に「双鳧相背飛、相遠日已長（双鳧相ひ背きて飛び、相ひ遠きこと 日に已に長し）」と。

5 扣舷忘日暮 6 卒歲以為娛

「扣舷」船端を叩いて拍子を取って歌う。鼓枻と同じ。

『楚辞』漁父辞に「漁父莞爾而笑、鼓枻而去。（漁父 莞爾として笑ひ、枻を鼓して去る。）」、王逸注に「叩船舷也。（船舷を叩くなり。）」とある。扣は叩に通じる。

「忘日暮」楽しさのあまり日が暮れるのも忘れてしまう。漢・班昭「東征賦」（『文選』卷九）に「悵容与而久駐兮、忘日夕而将昏。（悵として容与して久しく駐まり、日の夕べにして将に昏れんとするを忘る。）」。

「卒歲」年の瀬。また年を越す。『詩經』邶風・七月に「無衣無褐、何以卒歲（衣無く褐無くんば、何を

以てか歳を卒へん）」と。
「以為娛」心の楽しみとする。漢・司馬相如「子虛賦」（『文選』卷七）に「將割輪燂、自以為娛。（將割輪燂して、自ら以て娛しむと為す。）」。

梁・戴嵩「釣竿」

【本文及び書き下し】

- 1 試持玄渚釣 試みに玄渚の釣を持し
- 2 暫罷池陽獵 暫く池陽の獵を罷めん
- 3 翠羽飾長綸 翠羽 長綸を飾り
- 4 葉花裝小牒 葉花 小牒を装ふ
- 5 鉤利斷蓴糸 鉤 利くして 蓴糸を断ち
- 6 帆拳牽菱葉 帆 拳がりて 菱葉を牽く
- 7 聊載前魚童 聊か前魚の童を載せ
- 8 還看後舟妾 還た後舟の妾を看る

【日本語訳】

- 1 ひとまず深い池での釣りを続けることにして
- 2 しばらくは池陽での狩獵をやめておこう
- 3 カワセミの羽で長い釣り糸を飾り
- 4 ハスの花は小舟を飾り付けたかのよう
- 5 釣り針が鋭くて細いジュンサイを断ち切り
- 6 帆が風を受け、小舟がヒシの葉を引っ張っていく
- 7 取り敢えずは寵愛の衰えた稚児を舟に乗せたものの
- 8 後ろの舟に乗せた美しい女性をじっと見つめる

【校勘】

○『芸文類聚』卷四十一・『文苑英華』卷二百十・『古詩紀』卷百三・『劉孝威集』（『六朝詩集』）

0 「釣竿」、『類聚』『英華』『劉孝威集』並作「釣竿篇」。

「戴嵩」、『英華』作「劉孝威」。

4 「藻」、『英華』作「藻」。

「牒」、原作「縹」、『類聚』同。底本注云「拋同上及『英華』卷二一〇改」。今從。

5 「鉤」、原作「鉅」、『類聚』同。底本注云「據同上改」。今從之。

6 「帆」、原作「汎」、『類聚』同。底本注云「據同上改」。今從之。

「菱」、『劉孝威集』作「綸」。

7 「聊」、『劉孝威集』作「聯」。

8 「還看」、原「過看」。底本注云「同上作『還看』、是」。今從之。

【押韻】

「獵」「葉」「妾」入声二十九葉韻。「牒」、入声三十帖韻。葉・帖同用。

【作者】未詳。現存する詩は十首。『玉台新詠』卷十に「詠欲眠」詩を収める。

【語釈】

1 試持玄渚釣

「試持」ためしに続けてみる。持は持続、維持。

2 暫罷池陽獵

「玄渚」深い池。漢・張衡「西京賦」（『文選』卷二）に「海若游於玄渚、鯨魚失流而蹉跎。（海若 玄渚に遊び、鯨魚 流れを失ひて蹉跎す。）」とあり、呂延濟注に「池之深也」。また、川の中州とも。晋・陸機「赴洛詩」二首其一（『文選』卷二十六）に「南望泣玄渚、北邁涉長林（南のかた望みて 玄渚に泣き、北のかた邁きて 長林を渉る）」とあり、呂延濟注に「玄渚、江中洲渚也。」と。

「暫罷」ひとまずやめておく。梁・劉孝綽「秋夜詠琴詩」に「幽蘭暫罷曲、積雪更伝声（幽蘭 暫く曲を罷め、積雪 更に声を伝ふ）」と。梁詩以前には見当たらない。

「池陽」地名。池陽（陝西省西安市）の北に嶺山があり、こゝで狩獵が行われた。漢・楊雄「長楊賦」（『文選』卷九）に「櫟嶺而為弋、紆南山以為置（嶺に櫟ちて弋と為し、南山に紆らして以て置と為す。）」とあり、李善注に「服虔曰、『嶺、山名也』。孟康曰、『在池陽北』。（服虔 曰く、『嶺、山名なり』と。孟康 曰く、『池陽の北に在り』と。）」とある。

3 翠羽飾長綸 4 葉花裝小牒

「翠羽」カワセミの羽。飾りに使われた。『漢書』外戚伝下・孝成趙皇后（飛燕）に「皇后既立、後寵少

衰、而弟絶幸、為昭儀。居昭陽舍、…、明珠・翠羽飾之。（皇后 既に立てられ、後 寵 少しく衰ふるも、弟 絶だ幸せられ、昭儀と為る。昭陽舍に居り、…、明珠・翠羽 之れを飾る。）

【長綸】長い釣り糸。晋・徐広「釣賦」（『初学記』卷二十二）に「投芳餌于織糸、灑長綸于平流。（芳餌を織糸に投げ、長綸を平流に灑ぐ。）」と。

【萼花】ハスの花。齊・謝朓「曲池之水」詩に「芙蕖舞輕蒂、苞筍出芳叢（芙蕖 輕蒂を舞はせ、苞筍 芳叢に出づ）」と。

【小牒】小舟。六朝詩では他の用例が見当たらない。

5 鈎利断蓴糸 6 帆举牽菱葉

【蓴糸】糸のように細いジュンサイ。糸蓴とも。

【帆举】帆をあげて舟を出す。宋・鮑照「代櫓歌行」に「颺戾長風振、揺曳高帆举（颺戾として 長風 振るひ、揺曳として 高帆 举ぐ）」。

【菱葉】ヒシの葉。晋・無名氏「採蓮童曲」二曲其一に「泛舟採菱葉、過摘芙蓉花（舟を泛かべて 菱葉を採り、過りて摘む 芙蓉の花）」。

7 聊載前魚童 8 還看後舟妾

【前魚童】寵愛を失い棄てられた人。『戦国策』魏策四に「魏王与龍陽君共船而釣。龍陽君得十余魚而涕下。王曰、『有所不安乎。如是何不相告也』。…。对曰、『臣之始得魚也、臣甚喜。後得又益大。今臣

がある。

梁・劉孝綽「釣竿篇」

【本文及び書き下し】

- 1 釣舟画采鷁 釣舟 采鷁（さいげき）を画（えが）き
- 2 漁子服水紈 漁子 水紈（みづわん）を服す
- 3 金轄茱萸網 金轄 茱萸の網
- 4 銀鉤翡翠竿 銀鉤 翡翠の竿
- 5 斂櫓随水脈 櫓を斂（き）めて 水脈に随（したが）ひ
- 6 急槳渡江湍 槳を急がせて 江湍（かうたん）を渡る
- 7 湍長自不辭 湍 長さも 自ら辞（か）せず
- 8 前浦有佳期 前浦に佳期（か）有り
- 9 船交棹影合 船 交はりて 棹影（たう） 合し
- 10 浦深魚出遲 浦 深くして 魚の出づること 遅
- 11 荷根時触餌 荷根 時に餌に触（ふ）れ
- 12 菱芒乍冒糸 菱芒（りやうぼう） 乍（しばしば）糸に冒（か）る
- 13 蓮渡江南手 蓮は渡る 江南の手に
- 14 衣渝京兆眉 衣は渝（あ）ふ 京兆の眉に
- 15 垂竿自来楽 竿を垂るるは 自来 楽し
- 16 誰能為太師 誰か能く太師と為らんや

【日本語訳】

- 1 釣り船には色鮮やかなサギが描かれ
- 2 釣り人は氷のように真っ白な絹を身にまとう
- 3 金のくさびにカワハジカミで飾った網

直欲棄臣前之所得矣。今以臣之凶惡、而得為王扞枕席。今臣爵至人君、走人於庭、避人於途。四海之内美人亦甚多矣。聞臣之得幸於王也、必褰裳而趨大王。臣亦猶曩臣之前所得魚也。臣亦將棄矣。臣安能無涕出乎。（魏王 龍陽君と船を共にして釣る。龍陽君 十余魚を得て 涕 下る。王 曰く、『安からざる所有るか。是くの如くば何ぞ相ひ告げざる』と。…。对へて曰く、『臣の始めて魚を得たるや、臣 甚だ喜べり。後 得ること 又た益ます大なり。今 臣 直ちに臣の前の得る所を棄てんと欲す。今 臣の凶惡を以てして、王の為に枕席を扞ふを得たり。今 臣 爵は人君に至り、人を庭に走らせ、人を途に避けしむ。四海の内 美人も亦た甚だ多し。臣の王に幸せらるるを得るを聞くや、必ず裳を褰（か）けて大王に趨らん。臣も亦た猶ほ曩に臣の前に得たる所の魚のごときなり。臣も亦た將に棄てられんとす。臣 安くんぞ能く涕の出づる無からんや』と。）とある故事に拠る。

【還看】しばらくの間見つめる。齊・王融「臨高台」に「還看雲棟影、含月共徘徊（還た看る 雲棟の影の、月を含みて 共に徘徊するを）」。

【後舟妾】後ろの舟に乗せた美しい女性。晋・左思「呉都賦」（『文選』卷五）に「載漢女於後舟、追晋賈而同塵。（漢女を後舟に載せ、晋賈を追ひて塵を同じくす。）」とある。漢女は漢水の女神。また、梁簡文帝蕭綱に「夜遣内人還後舟」詩（『玉台』卷十）

- 4 銀の釣り針にカワセミの羽で飾った釣り竿
- 5 舟を漕ぐかいを休ませて舟を川の流れにまかせたり
- 6 かいを慌ただしく動かして早瀬を渡ったり
- 7 早瀬が長く続こうとも恐れることはない
- 8 向こうの船溜まりに彼女が待っているから
- 9 船がたくさん集まって、かいの影が重なり合い
- 10 船溜まりの水が深く、魚はなかなか水面に現れない
- 11 ハスの根が餌に触れたかと思えば
- 12 ヒシの尖った葉が釣り糸にからめ取られたりする
- 13 ハスは江南の女性の美しい手に渡り
- 14 その女性に衣服を着換えると都風の眉を画いた美人になる
- 15 釣りはこれまでもずっと楽しいものだった
- 16 周の武王を助けた太公望にはなれないにしても

【校勘】

○『芸文類聚』卷四十一・『文苑英華』卷二百十・『古詩紀』卷九十七・『芸文類聚』卷四十一作「劉孝威釣竿篇」、引紈・竿・湍・辞・期・遲六韻。

0 「釣竿篇」、原作「同前」、底本注云「拠『英華』『詩記』改」。

「劉孝綽」、『類聚』作「劉孝威」。

1 「漁子」、原作「魚子」、『類聚』同。底本注云「拠『英華』『詩記』改」。

5 「斂櫓」、『英華』作「促棹」、而注云「一作『斂櫓』」。

6 「槳」、『英華』作「艇」。

「江」、「類聚」作「沙」。『英華』注云「一作『急槳渡沙湍』」。

9 「船」、「類聚」作「蓮」。

「棹」、「英華』『詩記』並作「橈」、「英華』注云「一作『棹』」。

13 「渡」、「詩記」作「度」。

15 「来」、「英華』『詩記』並作「有」。『英華』注云「一作『来』」。

【押韻】

「純」「湍」、上平二十六桓韻。「竿」、上平二十五寒韻。寒・桓同用。「辞」「期」「糸」、上平七之韻。「遲」「眉」「師」、上平六脂韻。脂・之同用。

【作者】四八一〜五三九。南朝梁の詩人。本の名は冉、孝綽は字。彭城（江蘇省徐州）の人。劉繪の子。幼い頃から聰敏で、舅に当たる王融は神童と称し、沈約・任昉・范雲らにその文才を称賛された。天監（五〇二〜五一九）の初め、著作佐郎に起家したが、傲慢で人の反感を買うことが多く、何度か免官を繰り返した。昭明太子には特に文才を愛され、『文選』の編纂に深く関わった。彼の詩や文章は當時たいへん重んじられ、文集は数十万言を収めていたが、現存する詩は約七十首、文は十七篇に過ぎない。

【語釈】

第4句「銀鉤」との対から解した。

「茱萸網」香草であるカワハジカミで飾った網。六朝詩では他の用例は見当たらない。魏・曹植「浮萍篇」（『玉台』巻二）に「茱萸自有芳、不若桂与蘭（茱萸 自ら芳有り、桂と蘭とに若かず）」と。

「銀鉤」銀のように美しい釣り針。六朝詩には用例が見当たらないが、晋・王慶「釣魚賦」（『芸文類聚』巻九十六）に「然後抽纖纖、振修竿。垂銀鉤、運金丸。（然る後 纖纖を抽き、修竿を振るふ。銀鉤を垂れ、金丸を運らす。）」と。

「翡翠竿」カワセミの羽で飾った釣り竿。梁・戴暠「釣竿」には「翠羽飾長綸、蕤花装小鱗。翠羽 長綸を飾り、蕤花 小鱗を装ふ」とあった。

5 斂橈随水脈 6 急槳渡江湍

「斂橈」舟を漕ぐかいを片付ける。六朝詩では他の用例は見当たらない。橈、『楚辞』九歌・湘君に「薛荔柏兮蕙綸、荃橈兮蘭旌（薛荔は柏け 蕙は綸ひ、荃橈あり 蘭旌あり）」とあり、王逸注に「橈、船小楫也。（橈、船の小楫なり。）」と。

「随水脈」川の流れのままに。水脈、ここは河流の意。梁・王僧孺「秋日愁居答孔主簿詩」に「日華随水汎、樹影逐風輕（日華 水に随ひて汎かび、樹影 風を逐ひて輕し）」。

「急槳」かいを慌ただしく動かす。

「江湍」急流。宋・謝靈運「贈從弟弘元詩」 六章其四

1 釣舟画采鷁 2 漁子服水紉

「釣舟」唐代以降の詩文にはしばしば見えるが、六朝詩では他の用例は見当たらない。

「画采鷁」船首に彩りの美しい鷁の絵を描く。鷁はサギに似た水鳥の一種。漢・司馬相如「子虛賦」（『文選』巻七）に「文鷁を浮かべ、旌棹を揚ぐ。」とあり、郭璞注に「張揖曰、『鷁、水鳥也。画其象於船首也。』（張揖 曰く、『鷁、水鳥なり。其の象を船首に画くなり』と。）」。

「漁子」漁師。晋・木華「海賦」（『文選』巻十二）に「於是舟人・漁子、徂南極東。（是に於いて舟人・漁子、南に徂き東に極る。）」

「水紉」真つ白な絹。『漢書』地理志下に「後十四世、桓公用管仲、設輕重以富国、合諸侯成伯功、身在陪臣而取三帰。故其俗侈修、織作水紉綺繡純麗之物。（後 十四世、桓公 管仲を用ひ、輕重を設けて以て国を富ませ、諸侯を合はせ伯の功を成し、身は陪臣に在るも三帰を取る。故に其の俗 弥いよ侈り、織りて水紉・綺繡・純麗の物を作る。）」とあり、顔師古注に「水謂布帛之細、其色鮮絜如水者也。紉、素也。（水は布帛の細くして、其の色の鮮絜なること水の如きなる者を謂ふなり。紉、素なり。）」と。

3 金轄茱萸網 4 銀鉤翡翠竿

「金轄」釣り糸を竿に留めておくくさび。轄は車輪が車軸から外れないように留めておくくさび。ここは

に「緬邈荆巫、杳翳江湍（緬邈たり 荆巫、杳翳たり 江湍）」。

7 湍長自不辭 8 前浦有佳期

「湍長」急流が長く続く。湍は早瀬。梁・蕭子範「建安城門峽賦」（『芸文類聚』巻六）に「長湍一流而沸涌、曾山兩判而盤紆。（長湍は一たび流れて沸涌し、曾山は兩判にして盤紆す。）」。

「不辭」ものともしない。王運路『六朝詩歌語詞研究』（黒龍江教育出版社 一九九九）に「『不辭』本義是不推辭、進一步強調就有不怕・不顧義。『不辭』の本来の意味は辭退しないだが、さらに強調すると恐れない、目もくれないの意味になる。」とある。齊・王融「詠幔詩」（『玉台』巻四）に「月映不辭卷、風来輒自輕（月 映じて 卷かるるを辭せず、風 来たれば 輒ち自ら輕し）」と。

「前浦」先にある船溜まり。浦は支流が本流に合流するところ。しばしば船を停泊させる。『楚辞』九歌・湘君に「望涔陽兮極浦、橫大江兮揚靈（涔陽を極浦に望み、大江に横たはりて靈を揚ぐ）」と。

「佳期」恋人。齊・謝朓「同王主簿有所思」（『玉台』巻十）に「佳期期未帰、望望下鳴機（佳期 期すれども 未だ帰らず、望望として鳴機を下る）」とあるなど、六朝樂府ではしばしば思ひ人の意で用いる。王運路前掲書に詳しい。

9 船交棹影合 10 浦深魚出還

「船交」船が交錯する。船の数が多いこと。『史記』封禪書に「使人乃齎童男女入海求之。船交海中、皆以風為解。（人をして乃ち童男女を齎らして海に入りて之れを求めしむ。船海中に交はり、皆な風を以て解と為す。）」と見える。

「棹影」舟を漕ぐかいのシルエット。陶功曹「採菱曲」（『謝宣城詩集』卷二）に「棹影已流倡、輕舟復容与（棹影 已に流倡し、輕舟 復た容与たり）」と。流倡は流唱、広く伝わるように歌う。

「魚出」魚が水面に姿を現す。梁・江淹「雜體詩三十首」（『文選』卷三十一）其四「魏文帝遊宴 曹丕」に「淵魚猶伏浦、聽者未云疲（淵魚 猶ほ浦に伏し、聽く者 未だ云に疲れず）」とあり、李善注は『韓詩外伝』に「昔伯牙鼓琴、而淵魚出聽。（昔 伯牙琴を鼓して、淵魚 出で聽く。）」とあるのを引く。「江南」古辞に「江南可採蓮、蓮葉何田田、魚戲蓮葉間。魚戲蓮葉東、魚戲蓮葉西。魚戲蓮葉南、魚戲蓮葉北（江南 蓮を採るべし、蓮葉 何ぞ田田たる。魚は戯る 蓮葉の間。魚は戯る 蓮葉の東、魚は戯る 蓮葉の西。魚は戯る 蓮葉の南、魚は戯る 蓮葉の北）」とあるように、魚は吾の隠語、蓮は憐の隠語で恋人を表す。

11 荷根時触餌 12 菱芒乍胃糸

「荷根」ハスの地下茎。藕とも。六朝詩では他の用例

「自来」これまでずっと。宋・謝靈運「会吟行」（『文選』卷二十八）に「自来弥年代、賢達不可紀（自来 年代を弥り、賢達 紀すべからず）」。

「太師」周代、三公（太師・太傅・太保）の内、最も身分の高い位。ここは太公望呂尚のこと。渭水の辺で釣りをしているところを周の文王に見出された。

『史記』齊太公世家に

呂尚蓋嘗窮困、年老矣。以漁釣奸周西伯。西伯將出獵、卜之曰、「所獲非龍非鼉、非虎非羆。所獲霸王之輔」。於是周西伯獵、果遇太公於渭之陽、与語大說曰、「自吾先君太公曰、『当有聖人適周、周以興』。子真是邪。吾太公望子久矣」。故号之曰『太公望』、載与俱歸、立為師。（呂尚 蓋し嘗て窮困し、年 老いたり。漁釣を以て周の西伯に奸む。西伯 將に出でて獵せんとし、之れを卜して曰く、「獲る所は龍に非ず鼉に非ず、虎に非ず羆に非ず。獲る所は霸王の輔ならん」と。是に於いて周の西伯 獵し、果して太公に渭の陽に遇ひ、与に語りて大いに説んで曰く、「吾が先君太公より曰く、『当に聖人有りて周に適くべく、周 以て興らん』と。子 真是れならんか。吾が太公 子を望むこと久し」と。故に之れを号して『太公望』と曰ひ、載せて与に俱に歸り、立てて師と為す。）とある。

は見当たらない。

「菱芒」ヒシの尖った葉。芒はとげ。これも六朝詩では他の用例は見当たらない。

「胃糸」釣り糸に絡め取られる。胃は紐や縄で鳥獸を絡め取ること。『史記』司馬相如列伝に「胃騶褭、射封豕。（騶褭を胃し、封豕を射る。）」とあり、『文選』卷八「上林賦」は胃を縋に作り、李善注に『声類』曰、「縋、係取也、工犬の切。』とある。縋、係取するなり、工犬の切。』とある。

13 蓮渡江南手 14 衣渝京兆眉

「江南手」ハスを探る江南の美しい女性の手。右に引いた「江南」古辞参照。第8句「前浦有佳期」とあったのを承ける。

「衣渝」衣服を着替える。渝は改める、変える。「京兆眉」眉を美しく画いた女性。『漢書』張敞伝に「又為婦画眉、長安中伝張京兆眉撫。（又た婦の為に眉を画き、長安中 張京兆の眉撫と伝ふ。）」と見える故事に拠る。「京兆眉」の語は後に女性の美しい眉を表すようになる。

15 垂竿自来棗 16 誰能為太師

「垂竿」釣り竿を垂らす。釣りをすること。齊・謝朓「始出尚書省詩」（『文選』卷三十）に「乗此得蕭散、垂竿深澗底（此れに乗じて蕭散たるを得て、竿を深澗の底に垂れん）」と。

陳・張正見「釣竿篇」

【本文及び書き下し】

- | | |
|----------|----------------|
| 1 結宇長江側 | 宇を結ぶ 長江の側 |
| 2 垂釣広川濤 | 釣を垂る 広川の濤 |
| 3 竹竿横翡翠 | 竹竿 翡翠を横たへ |
| 4 桂髓擲黄金 | 桂髓 黄金を擲つ |
| 5 人来水鳥没 | 人 来たりて 水鳥 没し |
| 6 櫂渡岸花沈 | 櫂 渡りて 岸花 沈む |
| 7 蓮揺見魚近 | 蓮 揺れて 魚の近きを見はし |
| 8 綸尽覺潭深 | 綸 尽きて 潭の深きを覚ゆ |
| 9 渭水終須卜 | 渭水 終に卜するを須ち |
| 10 滄浪徒自吟 | 滄浪 徒らに自ら吟ず |
| 11 空嗟芳餌下 | 空しく嗟く 芳餌の下 |
| 12 独見有貪心 | 独り貪心有るを見んとは |

【日本語訳】

- 住まいを長江のほとりにかまえ
- 釣り糸を広い川の岸辺に垂らす
- 竹の竿を一振りすればカワセミの羽がひらりと動き
- 桂の釣り船から金の糸留めが付いた釣り竿を振る
- 人が近づいたので水鳥は水に潜り
- 舟がやって来たので岸辺の花は波にかくれる
- ハスが揺れて、魚がすぐ近くににいるのが分かる
- 釣り糸が伸びきって、よどみが深いのだと分かる
- 太公望呂尚は渭水で釣り糸を垂れていたが、卜占によつて周の文王に見出されたが、

10 屈原の生き方を問うた漁父は虚しく「滄浪歌」を歌うしかなかった
11 うまそうに見えるエサには食欲な心しかひそんでいないことを
12 むだに嘆くばかりなのだ

【校勘】

○『初学記』卷二十二・『文苑英華』卷二百十・『古詩紀』卷百十二

0 「釣竿篇」、原作「釣竿篇」、底本改「同前」、注云「按本書例改」。

2 「釣広」、『英華』作「釣渡」、注云「一作『釣広』」。

5 「水」、『英華』作「戲」、注云「一作『水』」。

6 「渡」、『詩記』作「度」。

11 「嗟」、『英華』作「明」、注云「一作『嗟』」。

【押韻】

「潯」「金」「沈」「深」「吟」「心」、下平二十一侵韻。

【作者】生没年不詳。梁・陳に仕えた。字は見贖、清河の東武城（山東省東武城の西北）の人。梁の簡文帝が東宮にあつた時、年十三にして頌を獻じて大いに賞賛された。梁末の喪乱の際には匡俗山（廬山のこと）に難を避けたが、陳の武帝が即位（五五七年）するに及び、詔によって都建康に召還され、宣帝の太建（五

六九〇五八二）中に没した。時に年四十九。『陳書』三十四・『南史』七十二に伝がある。『陳書』本伝には「其五言詩尤善、大行於世。（其の五言詩尤も善し、大いに世に行はる。）」と評するが、南宋・嚴羽は『滄浪詩話』考証で「南北朝人惟張正見詩最多、而最無足省發。所謂『雖多亦奚以為』。（南北朝の人惟だ張正見の詩のみ最も多くして、最も省発するに足る無し。所謂『多しと雖も亦た奚を以て為さん。』）」と酷評する。道坂昭広氏の「良くも悪くも陳の文学の一面を象徴する詩人である。」（興膳宏編『六朝詩人伝』大修館書店 二〇〇〇）という評が公平なところだろう。

【語釈】

1 結宇長江側 2 垂釣広川潯

【結宇】家をかまえる。晋・張協「雜詩」十首（『文選』卷二十九）其九に「結宇窮岡曲、耦耕幽藪陰（宇を結ぶ 窮岡の曲、耦耕す 幽藪の陰）」。

【垂釣】竿を垂らして魚を釣る。魏・曹植「七啓」（『文選』卷三十四）に「乃使任子垂釣、魏氏発機。（乃ち任子をして釣を垂れ、魏氏をして機を發せしむ。）」。

【広川】広々とした川。魏・王粲「從軍詩」五首（『文選』卷二十七）其三に「方舟順広川、薄暮未安坻（舟を方べて 広川に順ひ、薄暮 未だ坻に安んぜず）」とある。

【潯】水辺。漢・枚乘「七發」（『文選』卷三十四）に「游涉乎雲林、周馳乎蘭沢、珥節乎江潯。（雲林を游涉し、蘭沢を周馳して、節を江潯に珥ふ。）」とあり、李善注は「字林』を引いて「潯、水涯也。」という。

3 竹竿横翡翠 4 桂髓擲黄金

【竹竿】竹で作った釣り竿。漢・無名氏「白頭吟」（『玉台』卷一）に「竹竿何嫋嫋、魚尾何萋萋（竹竿 何ぞ嫋嫋たる、魚尾 何ぞ萋萋たる）」とある。

【横翡翠】釣り竿や釣り糸を飾るカワセミの羽が自在に動く。梁・戴暠「釣竿」に「翠羽飾長綸（翠羽 長綸を飾る）」とあり、梁・劉孝綽「釣竿篇」にも「銀鉤翡翠竿（銀鉤 翡翠の竿）」とあった。

【桂髓】桂で作った櫂、また舟。梁・沈約「釣竿」に「桂舟既容与（桂舟 既に容与たり）」と見えた。黄金、梁・劉孝綽「釣竿篇」に「金轄茱萸網（金轄 茱萸の網）」とあった。

5 人来水鳥没 6 櫂渡岸花沈

【水鳥没】水鳥が水に潜る。齊・謝朓「和劉西曹望海台詩」に「差池遠雁没、颯沓群鳧驚（差池として 遠雁 没し、颯沓として 群鳧 驚く）。」

【櫂渡】櫂、楫の別体。ここは舟を表す。梁・沈約「江

南曲」に「但令舟楫渡、寧計路嶄嵌（但だ舟をして楫ぎ渡らしめん、寧ぞ計らん 路の嶄嵌たるを）。」

7 蓮搖見魚近 8 綸尽覺潭深

【蓮搖】ハスの葉が揺れ動く。齊・謝朓「出下館詩」に「紅蓮搖弱苻、丹藤繞新竹（紅蓮 弱苻に揺れ、丹藤 新竹を繞る）。」

【綸】釣り糸。梁・戴暠「釣竿」に「翠羽飾長綸（翠羽 長綸を飾る）。」

【潭深】水の下どみが深いこと。梁武帝蕭衍「登北顧樓詩」に「深潭下無底、高岸長不測（深潭 下りて底無く、高岸 長くして 測らず）。」

9 渭水終須卜 10 滄浪徒自吟

【渭水終須卜】右の梁・劉孝綽「釣竿篇」、「太師」の語釈に引いた太公望呂尚の故事をいう。

【滄浪徒自吟】『楚辭』漁父辞に「漁父莞爾而笑、鼓枻而去。乃歌曰、『滄浪之水清兮、可以濯我纓。滄浪之水濁兮、可以濯我足』。遂去、不復与言。（漁父 莞爾として笑ひ、枻を鼓して去る。乃ち歌ひて曰く、『滄浪の水 清まば、以て我が纓を濯ふべし。滄浪の水 濁らば、以て我が足を濯ふべし』と。遂に去り、復た与に言はず。）」と見える故事をいう。

11 空嗟芳餌下 12 独見有貪心

「空嗟」無駄だと分かっているにも悲しみを声に出してしまふ。梁簡文帝蕭綱「擬落日窗中坐詩」（『玉台』卷七）に「空嗟千歳久、願得及陽春（空しく嗟く千歳の久しきを、願はくは陽春に及ぶを得ん）」。「芳餌」おいしそうなエサ。魏・文帝曹丕「釣竿」に「行路之好者、芳餌欲何為（行路の好む者、芳餌もて何をか為さんと欲す）」とあった。

「独見」くだけが姿をあらわす。くしか見えない。梁・江淹「效阮公詩十五首」其一に「寧知霜雪後、独見松竹心（寧ぞ知らん 霜雪の後、独り松竹の心のみ見はれんとは）」。

「貪心」貪欲な心。『管子』七法に「故有罪者不怨上、受賞者無貪心。（故に罪有る者は上を怨みず、受賞を愛する者は貪心無し。）」と。

隋・李巨仁「釣竿篇」

【本文及び書き下し】

- 1 潺湲面江海 潺湲として江海に面し
- 2 混漾曝波瀾 混漾として波瀾を曝る
- 3 不惜黄金餌 黄金の餌を惜しまず
- 4 唯憐翡翠竿 唯だ翡翠の竿を憐れむのみ
- 5 斜綸控急水 綸を斜めにして急水に控げ
- 6 定楫下飛湍 楫を定めて飛湍を下る
- 7 潭迴風来易 潭 迴かに 風 来たること 易く

【押韻】

「瀾」「竿」「難」「安」、上平二十五寒韻。「湍」上平二十六桓韻。寒・桓同用。

【作者】未詳。現存する詩は四首。

【語釈】

1 潺湲面江海 2 混漾曝波瀾

「潺湲」さらさらと流れる水の様。疊韻。『楚辭』九歌・湘夫人に「慌忽兮遠望、觀流水兮潺湲（慌忽として遠く望み、流水の潺湲たるを觀る）」。

「江海」大きな川と海。齊・謝朓「和伏武昌登孫權故城詩」（『文選』卷三十）に「江海既無波、俯仰流英盼（江海 既に波無く、俯仰して英盼を流す）」とあり、李善注は『礼斗威儀』に「其君乗木而王、其政象平、則江海不揚波。（其の君 乗木に乗りて王たり、其の政 平らかなるに象れば、則ち江海波を揚げず。）」とあるのを引く。「盼」について、胡克家『文選考異』は「案、『盼』当作『眈』。…『眈』即『眈』別体。（案ずるに、『眈』当に『眈』に作るべし。…『眈』即ち『眈』の別体。）」とする。

「混漾」水の深く広い様。疊韻。晋・潘岳「西征賦」（『文選』卷十）に「其池則湯湯汗汗、混漾弥漫、浩如河漢。（其の池は則ち湯湯汗汗、混漾として弥漫し、浩きこと河漢の如し。）」

- 8 川長霧歇難 川 長く 霧 歇むこと 難し
- 9 寄言朝市客 言を寄す 朝市の客に
- 10 滄浪徒自安 滄浪 徒らに自ら安しと

【日本語訳】

- 1 波音を響かせる大きな川と海とを眼の前にし
- 2 深々とした淵で沸き立つ波を眺める
- 3 りっぱな餌など惜しみはしないが
- 4 カワセミの羽で飾った釣り竿は大事にしたい
- 5 釣り糸を急流に斜めに投げ入れ
- 6 舟のかじを定めて早瀬を下る
- 7 深い淵はまだ先なので舟が下るにつれて風が吹き
- 8 川がどこまでも続くので霧がなかなか晴れない
- 9 名誉や利益を争う朝廷や市場の人々に伝えよう
- 10 私は青く清らかな波間でただ自分で安楽を求めるばかりなのだ

【校勘】

- 『初学記』卷二十二・『文苑英華』卷二百十・『古詩紀』卷百三十七
- 2 「曝」、「初学記」作「属」。
 - 4 「憐」、「初学記」作「懽」。「翡翠」、「初学記」作「翠竹」。
 - 8 「歇」、「初学記」作「散」。
 - 10 「徒」、「初学記」「詩記」並作「余」。

「曝」じつと見る。

「波瀾」沸き立つ波。宋・謝靈運「登池上楼詩」（『文選』卷二十二）に「傾耳聆波瀾、举目眺嶠嶠（耳を傾けて波瀾を聆き、目を挙げて嶠嶠を眺む）」。

3 不惜黄金餌 4 唯憐翡翠竿

「不惜」物惜しみしない。「古詩十九首」（『文選』卷二十九）其五に「不惜歌者苦、但傷知音稀（歌ふ者の苦しきを惜しまず、但だ知音の稀なるを傷む）」。

「黄金餌」りっぱな餌。六朝詩では他の用例は見当たらない。

「唯憐」くへのみ心惹かれる。梁・劉孝綽「賦得遺所思詩」（『玉台』卷八）に「所思不可寄、唯憐盈袖香（思ふ所には寄すべからず、唯だ憐む 盈袖の香）」。

「翡翠竿」カワセミの羽で飾った釣り竿。梁・戴暠「釣竿」にも「翠羽飾長綸、葉花裝小鱗 翠羽 長綸を飾り、葉花 小鱗を装ふ」とあった。

5 斜綸控急水 6 定楫下飛湍

「斜綸」釣り糸を斜めにのばす。これも他の用例は見当たらない。

「控急水」流れの速い川に釣り糸を投じる。『莊子』逍遙遊に「時則不至而控於地而已矣。（時に則ち至らずして地に控するのみ。）」とあり、成玄英の疏に「控、投也。」とある。

「定楫」舟のかじを安定させる。これも他の用例は見当たらない。

「飛湍」急流、早瀬。晋・李顥「涉湖詩」に「驚飈揚飛湍、浮霄薄懸岨（驚飈 飛湍を揚げ、浮霄懸岨に薄る）」と。

7 潭迴風來易 8 川長霧歇難

「来易」第8句「歇難」と対にするため「易来」の語順を転倒した。

「歇難」押韻のため「難歇」の語順を転倒したのでらう。梁・王台卿「和簡文帝賽漢高祖廟詩」に「階長霧難歇、窓高雲易通（階 長ければ 霧 歇み難く、窓 高ければ 雲 通り易し）」と。

9 寄言朝市客 10 滄浪徒自安

「寄言」言伝する。『楚辞』九章・思美人に「願寄言於浮雲兮、遇豐隆而不將（言を浮雲に寄せんことを願ひ、豐隆に遇ふも將はれず）」。

「朝市客」俗世間の人々。朝市は朝廷と市場、転じて名譽や利益を求める人々が集まるところ。『史記』張儀列伝に「臣聞、争名者於朝、争利者於市。今三川・周室、天下之朝市也。（臣 聞く、名を争ふ者は朝に於いてし、利を争ふ者は市に於いてす、と。今 三川・周室は、天下の朝市なり。）」と。

「滄浪」あおく清らかな波。前句「朝市」に対して言う。陳・張正見「釣竿篇」に「渭水終須卜、滄浪徒

7 軍中で歌われる音楽に耳を傾けてみれば

8 別れの悲しみを歌う「君馬黄」ばかり

【校勘】

○『文苑英華』卷百九十八・『古詩紀』卷百十六 無異同

【押韻】

「陽」「腸」「梁」、下平十陽韻。「光」「黄」、下平十一唐韻。陽・唐同用。

【作者】未詳。『陳書』蕭引伝に「〔太建〕十二年、吏部侍郎欠、所司屢举王寛・謝燮等、帝並不用、乃中詔用引。（〔太建〕十二年、吏部侍郎 欠け、所司 屢しば王寛・謝燮等を举ぐるも、帝 並びに用ひず、乃ち中詔して引を用ふ。）」と見える。太建は陳・宣帝の年号、五六九〜五八二。現存する詩は五首。

【語釈】

1 隴阪望咸陽 2 征人惨思腸

「隴阪」陝西省と甘肅省との間にある山の名。隴坻、隴山とも。唐・杜佑『通典』卷一百七十四に「天水郡……有大坂、名曰隴坻、亦曰隴山。（天水郡……大坂有り、名づけて隴坻と曰ひ、亦た隴山と曰ふ。）」また、『太平御覽』卷五十六に引く「三秦記」に「其坂九廻、不知高幾里。欲上者七日乃越。

自吟（渭水 終に卜するを須ち、滄浪 徒らに自ら吟ず）」と類似句が見える。張正見の場合は太公望と『楚辞』の漁父との対比だった。

「自安」自分自身で安樂を図る。晋・陶潜「庚戌歲九月中於西田穫早稻詩」に「孰是都不營、而以求自安（孰か是れ都て營らずして、而も以て自ら安んずるを求む）」と。

陳・謝燮「隴頭水」

【本文及び書き下し】

- | | |
|---------|---------------|
| 1 隴阪望咸陽 | 隴阪に咸陽を望み |
| 2 征人惨思腸 | 征人 思腸惨たり |
| 3 咽流喧断岸 | 咽流 断岸に喧しく |
| 4 遊沫聚飛梁 | 遊沫 飛梁に聚む |
| 5 鳧分斂冰彩 | 鳧は分かれて 氷彩を斂め |
| 6 虹飲照旗光 | 虹は飲みて 旗光に照らさる |
| 7 試聽鐃歌曲 | 試みに聴く 鐃歌曲 |
| 8 唯吟君馬黄 | 唯だ吟ず 「君馬黄」 |

【日本語訳】

- 1 隴山から咸陽の辺りを眺めると
- 2 出征兵士たちははらわたがほど悲しい
- 3 咽び泣くような川の流れが切り立った崖に騒がしく
- 4 水しぶきが高く架かる橋にまで届いて集まってい
- 5 つれと別れ川面に浮かぶカモは氷の輝きを集め
- 6 水を飲み下りて来た虹は旗の光に照らされる

高処可容百余家、下処數十万戸。上有清水四注。俗歌曰、「隴頭流水、鳴声幽咽。遥望秦川、心肝断絶」。去長安千里、望秦川如帶。又関中人上隴者、還望故郷悲思、而歌則有絶死者。（其の坂 九廻し、高きこと幾里なるかを知らず。上らんと欲する者 七日にして乃ち越ゆ。高き処は百余家を容るべく、下き処は数十万戸。上に清水の四もに注ぐ有り。俗歌に曰く、「隴頭流水、鳴声 幽咽す。遙かに秦川を望めば、心肝 断絶す」と。長安を去ること千里、秦川を望めば帯の如し。又た関中の人 隴に上れば、故郷を還望して悲思し、而も歌へば則ち絶死する者有り。）」。

「咸陽」秦の都。陝西省西安市の北西。『史記』呂不韋列伝に「布咸陽市門、懸千金其上、延諸侯遊士賓客有能増損一字者予千金。（咸陽の市門に布き、千金を其の上に懸け、諸侯の遊士賓客を延き能く一字を増損する者有れば千金を予へん。）」とあり、『索隱』に「『地理志』『右扶風渭城県、故咸陽、…』。案、咸訓皆、其地在渭水之北、北阪之南、水北曰陽、山南亦曰陽、皆在二者之陽也。（『地理志』に『右扶風 渭城県、故の咸陽なり、…』と。案ずるに、咸 皆と訓じ、其の地 渭水の北、北阪の南に在り、水の北を陽と曰ひ、山の南も亦た陽と曰ひ、皆な二者の陽に在るなり。）」と。陳・徐陵「隴頭水」にも「回首咸陽中、唯言夢時往（首を回らす 咸陽の中、唯だ言ふ 夢時に往かんと）」と見えた。

「征人」故郷を遠く離れた旅人。また出征兵士。宋・鮑照「擬古詩」八首其七（『玉台』巻四）に「去歲征人還、流伝旧相識。聞君上隴時、東望久歎息（去歲 征人 還り、流伝す 旧相識。聞く 君 隴に上りし時、東望して 久しく歎息す、と）」。梁・元帝蕭繹「隴頭水」にも「故郷迷遠近、征人分去留（故郷 遠近に迷ひ、征人 去留を分かつたる）」と見えた。

「慘」悲痛な様。『詩経』陳風・月出に「舒夭紹兮、勞心慘兮（舒にして天紹たり、勞心 慘たり）」と。「思腸」思い。腸は心の内。魏・曹丕「燕歌行」二首（『玉台』巻九）其二に「群燕辞帰雁南翔、念君客遊多思腸（群燕 辞し帰り 雁 南に翔び、君が客遊を念へば 思腸多し）」とある。但し、「多思腸」、「文選」巻二十七は「思断腸」に作る。

3 咽流喧断岸 4 遊沫聚飛梁

「咽流」咽び泣くような音をたてて流れる川。六朝詩では他に用例が見当たらない。右に引いた「三秦記」中の「俗歌」に「隴頭流水、鳴声幽咽」とあるのに拠る。

「断岸」切り立った崖。中国語の「岸」は崖の意。宋・鮑照「蕪城賦」（『文選』巻十一）に「崿若断岸、矗似長雲。（崿として断岸の若く、矗として長雲に似る。）」

「遊沫」川面から舞い上がり空中を漂う泡。遊は元の

綱「石橋詩」に「写虹便欲飲、図星逼似真（虹を写して便ち飲まんと欲し、星を図きて逼ること真に似る）」と。

「旗光」輝くように美しい旗。六朝詩では他の用例が見当たらない。

7 試聴鏡歌曲 8 唯吟君馬黄

「鏡歌曲」ここは軍中で用いる歌曲の意。短篇鏡歌とも。『樂府詩集』巻十六・鼓吹曲辭一題解に蔡邕『礼樂志』を引き「漢樂四品、其四曰短篇鏡歌、軍樂也。黄帝岐伯所作、以建威揚德、風敵勤士也。（漢樂四品、其の四を短篇鏡歌と曰ひ、軍樂なり。黄帝の岐伯の作る所にして、以て威を建て徳を揚げ、敵を風し士を勤ますなり。）」という。岐伯は黄帝の時代の名医。現存する漢鏡歌十八曲の内、戦争を描くものは「戦城南」一篇しかなく、軍樂とする説には異論も多い。鏡は『宋書』樂志一に「鏡、如鈴而無舌、有柄、執而鳴之。（鏡、鈴の如くして舌無く、柄有り、執りて之れを鳴らす。）」とある。

「君馬黄」漢鏡歌十八曲の一。古辞は前半四句と後半六句とで内容に大きな隔たりがある。後半六句は、「美人帰以南、駕車馳馬、美人傷我心。佳人帰以北、駕車馳馬、佳人安終極（美人 帰するに南を以てし、車を駕し 馬を馳せしめ、美人 我が心を傷ましむ。佳人 帰するに北を以てし、車を駕し 馬を馳せ、佳人 安くにか終極あらん）」と「美人」「佳人」との別

場所から離れた状態にあること。これも六朝詩には他の用例が見当たらない。

「飛梁」空中に高く架かる橋。漢・楊雄「甘泉賦」に「歴倒景而絶飛梁兮、浮蟻蠓而撤天。（倒景を歴て飛梁を絶り、蟻蠓に浮かんで天を撤ふ。）」とあり、李善注に「晋灼曰、『飛梁、浮道之橋也。』」と。

5 疊分斂水彩 6 虹飲照旗光

「疊分」連れ立って飛んでいたカモが別れ別れになる。「李陵録別詩」二十一首「其十一」に「双疊相背飛、相遠日已長（双疊 相ひ背きて飛び、相ひ遠きこと日に已に長し）」と。これも六朝詩では他の用例が見当たらない。双声。

「水彩」氷の輝き。梁・沈君攸「詠氷应教詩」に「日華照水彩、灼爍自相明（日華 水彩を照らし、灼爍として 自ら相ひ明るし）」とある。

「虹飲」虹が下りて来て水を飲む。虹が架かる様をいう。『漢書』武五子伝・燕刺王劉旦伝に、「是時天雨、虹下属宮中飲井水、井水竭。（是の時 天 雨ふらせ、虹 下り 宮中に属なりて井の水を飲まんとするに、井の水 竭く。）」と見える。虹については、佐藤保『漢詩のイメージ』（大修館書店 一九九二）に「…虫ヘンがついていることから察せられるように、昔は虫、とは言っても主に爬虫類の一種と考えられていたらしい。」との説明がある。梁簡文帝蕭

れを描く。陳代には「君馬黄」古辞を別離の悲しみを主題とする歌として読んでいたのかもしれない。

陳・張正見「隴頭水」二首其一

【本文及び書き下し】

1 隴頭鳴四注	隴頭	鳴きて四もに注ぎ
2 征人逐貳師	征人	貳師を逐ふ
3 羌笛含流咽	羌笛	流咽を含み
4 胡笳雜水悲	胡笳	水悲を雜ふ
5 湍高飛轉駛	湍	高くして 飛ぶこと 轉た 駛く
6 澗淺蕩還遲	澗	淺くして 蕩として 還た 遲し
7 前旌去不見	前旌	去りて見えぬ
8 上路杳無期	路に上れば	杳として期無し

【日本語訳】

1 隴山の頂から湧き水が鳴いて四方へ流れ下り
2 出征兵士たちは貳師將軍を追い掛けようとしている
3 羌笛の音は咽び泣くような水音をつつみこみ
4 胡笳の調べは川の流れの悲しい音をまじえる
5 流れ落ちる急流は高所から飛ぶようにますます速く
6 谷川は浅く、水の流れはゆっくりとただよう
7 軍旅の先頭を行く旗印が遠く離れて見えなくなった
8 隴頭を出発すると、帰れるのは遙か先、いったい何時のことになるのか

【校勘】

○『文苑英華』卷百九十八・『古詩紀』卷百二十一
3 「含」、『英華』作「合」、注云「一作『含』」。
7 「旌」、『英華』作「旗」。

【押韻】
「師」「悲」「遲」、上平六脂韻。「期」、上平七之韻。
脂・之同用。

【作者】生没年不詳。梁・陳に仕えた。字は見蹟、清河の東武城（山東省東武城の西北）の人。梁の簡文帝が東宮にあった時、年十三にして頌を獻じて大いに賞賛された。梁末の喪乱の際には匡俗山（廬山のこと）に難を避けたが、陳の武帝が即位（五五七年）するに及び、詔によって都建康に召還され、宣帝の太建（五六九〜五八二）中に没した。時に年四十九。『陳書』三十四・『南史』七十二に伝がある。『陳書』本伝には「其五言詩尤善、大行於世。（其の五言詩　尤も善し、大いに世に行はる。）」と評するが、南宋・嚴羽は『滄浪詩話』考証で「南北朝人惟張正見詩最多、而最無足省發。所謂『雖多亦奚以為』。（南北朝の人惟だ張正見の詩のみ最も多くして、最も省發するに足る無し。所謂『多しと雖も亦た奚を以て為さん。』）」と酷評する。道坂昭広氏の「良くも悪くも陳の文学の一面を象徴する詩人である。」（興膳宏編『六朝詩人伝』大修館書店　二〇〇〇）という評が公平なところだと思う。

は『風俗通』に「笛元羌出、又有羌笛。然羌笛与笛、二器不同、長於古笛、有三孔、大小異、故謂之双笛。（笛　元羌に出で、又た羌笛有り。然れば羌笛と笛と、二器　同じからず、古笛より長く、三孔有り、大小　異なる、故に之れを双笛と謂ふ。）」とあるのを引く。六朝詩では右に引いた虞羲「霍將軍北伐詩」に現れるのが早い例のようである。

「流咽」水の流れの咽び泣くような音。六朝詩では他の用例は見当たらない。

【胡笳】北方の遊牧民族に由来する葦笛。漢・蔡琰「悲憤詩」（『後漢書』列女伝・蔡琰）二首其二に「胡笳動兮辺馬鳴、孤雁帰兮声嚶嚶」（胡笳　動きて　辺馬　鳴き、孤雁　帰りて　声　嚶嚶）。

「水悲」「流咽」との対から、流れる水の悲しい音。

5 湍高飛転駄　6 澗浅蕩還遲

「湍高」激しい水が高いところから流れ落ちる。
「飛転駄」飛ぶようにしてますます速くなる。

「澗浅」谷川が浅い。

「蕩還遲」水が漂い流れるけれどもやはり遅い。

7 前旌去不見　8 上路杳無期

「前旌」先頭を行く旗印。陳・徐陵「為梁貞陽侯答王太尉書」（『梁書』王僧弁伝）に「前旌未举、即自披猖、驚悼之情、弥以傷側。（前旌　未だ挙がらざるに、即ち自ら披猖し、驚悼の情、弥いよ以て

【語釈】

1 隴頭鳴四注　2 征人逐貳師

「隴頭鳴四注」隴山から流れ下る水の音が咽び泣くように聞こえる。謝朓「隴頭水」の「隴阪」語釈参照。

梁・虞羲「霍將軍北伐詩」（『文選』卷二十一）に「胡笳関下思、羌笛隴頭鳴（胡笳　関下に思ひ、羌笛　隴頭に鳴く）」。

「征人」出征兵士。梁・元帝蕭繹「隴頭水」に「故郷迷遠近、征人分去留（故郷　遠近に迷ひ、征人　去留を分かつたる）」、謝朓「隴頭水」にも「隴阪望咸陽、征人慘思腸（隴阪に咸陽を望み、征人　思腸惨たり）」とあった。

「貳師」前漢の武帝、李広利（？〜前九十）。太初元（前百四）年、武帝は李広利を貳師將軍に任じ、大宛（フェルガナ）貳師城の良馬を奪取しよう命じた。最初の遠征は成功しなかったが、二度目の遠征で大宛城を陥れ、多くの良馬を得た。征和三（前九十）年、匈奴と戦って敗れ、単于に殺された。『漢書』に伝がある。

3 羌笛含流咽　4 胡笳雜水悲

「羌笛」西方の遊牧民族に由来する笛。後漢・馬融「長笛賦」（『文選』卷十八）に「近世双笛從羌起、羌人伐竹未及已。（近世の双笛　羌より起こり、羌人　竹を伐り未だ已むに及ばず。）」とあり、李善注

「上路」出発する。前途に就く。魏・曹植「蝦蟇篇」に「俯觀上路人、勢利惟是謀（俯して觀る　路に上る人の、勢利を惟だ是れ謀るを）」。

「杳無期」出征が終わる時は遙か遠く、何時帰れるのか分からない。梁・王筠「和吳主簿詩六首」（『玉台』卷八）遊望二首其一に「会日杳無期、薜華安得久（会日　杳として期無く、薜華　安くんぞ久しきを得ん）」。

陳・張正見「隴頭水」二首其二

【本文及び書き下し】

- | | |
|---------|--------------------|
| 1 隴頭流水急 | 隴頭　流水　急に |
| 2 流急行難渡 | 流れ　急にして　行　渡り難し |
| 3 遠入隗囂營 | 遠く入る　隗囂の營 |
| 4 傍侵酒泉路 | 傍らに侵す　酒泉の路 |
| 5 心交賜寶刀 | 心交　寶刀を賜ひ |
| 6 小婦成紈袴 | 小婦　紈袴を成す |
| 7 欲知別家久 | 家と別ることの久しきを知らんと欲せば |
| 8 戎衣今已故 | 戎衣　今　已に故し |

【日本語訳】

- 1 隴山から流れ下る川の水は急に
- 2 流れが急であれば川を渡るのも難しい
- 3 兵士たちは遠くは隗囂の宮殿に侵入し

- 4 近くは酒泉への道に攻め込んでいく
- 5 心知ったる友はりっぱな戦刀をくれ
- 6 末の弟の妻は薄絹のズボンを作ってくれた
- 7 家族と別れて久しいことは
- 8 この軍服がもはやボロボロになっていることからお分かりでしょう。

【校勘】

○『文苑英華』卷百九十八・『古詩紀』卷百十一・『文鏡秘府論』西卷

0 『秘府論』云「呉人徐陵、東南之秀、所作文筆、未曾犯声。唯横吹曲云云」。

2 「流」、『秘府論』作「水」。

3 「遠」、『秘府論』作「半」。

5 「賜」、『秘府論』作「贈」。

6 「成」、『秘府論』作「裁」。

【押韻】

「渡」「路」「袴」「故」、去声十一暮韻。

【語釈】

1 隴頭流水急 2 流急行難渡

「流水急」隴山から水が勢いよく流れ落ちる。梁・蕭子暉「隴頭水」(『顔氏家訓』文章篇。この詩は『樂府詩集』に収めない。)に「天寒隴水急、散漫俱分瀉(天寒くして隴水急に、散漫として俱に

分かれ瀉ぐ)」

「流急」梁元帝蕭繹「望江中月影詩」(『芸文類聚』卷一、『初学記』卷一。『文苑英華』卷百五十二作梁簡文帝『望江中月』。)に「風来如可泛、流急不成円(風来たりて泛かぶべきが如く、流れ急にして円を成さず)」。

「難渡」渡るのが難しい。齊・謝朓「臨溪送別詩」に「荒城迴易陰、秋溪広難渡(荒城廻かにして陰り易く、秋溪広くして渡り難し)」。

3 遠入隗囂營 4 傍侵酒泉路

「隗囂營」隗囂(？～三三)のとりで。隗囂は天水成紀の人。前漢末から後漢の初めまで、自ら西州上將軍と称して、隴右(甘肅省六盤山の西、黄河の東)に割拠し、天水(天水市)に宮殿を置いた。杜甫「秦州雜詩」二十首其二に「秦州城北寺、勝跡隗囂宮(秦州城北の寺、勝跡隗囂の宮)」と見える。天水は隴山から見て西南に当たる。

「傍侵」近くではよく攻め込む。第3句「遠入」との対。六朝詩では他の用例は見当たらない。

「酒泉」地名。甘肅省西北部、河西回廊の西端に位置する。隴山の西北。

5 心交賜宝刀 6 小婦成執袴

「心交」親友。王雲路『六朝詩歌語詞研究』(黒龍江教育出版社 一九九九)に、この二句を徐陵の作と

して引いた後、『心交』謂知心朋友(按、此詩『文苑英華』列入張正見詩)。『漢語大詞典』已收此詞、例証為唐・宋詩文、茲為之提前用例。(『心交』は気心の知れた友を言う(按ずるに、この詩は『文苑英華』では張正見の詩に入れられている)。『漢語大詞典』は既にこの語を収め、唐宋の詩文を例証とするが、ここにはより早い用例を挙げる。)とある。『漢語大詞典』が引く唐代の用例は晩唐・鮑溶の「送蕭世秀才」詩「心交別我西京去、愁滿春魂不易醒(心交別我西京去、愁滿春魂不易醒)」。

「宝刀」りっぱな戦刀。魏・曹植「宝刀賦」序に「建安中、家父魏王乃命有司造宝刀五枚。三年乃就。以龍・虎・熊・馬・雀為識。(建安中、家父魏王乃ち有司に命じて宝刀五枚を造らしむ。三年にして乃ち就り、龍・虎・熊・馬・雀を以て識と為す。)」。

「小婦」末子の妻。漢・無名氏「長安有狹斜行」古辭に「大子二千石、中子孝廉郎。小子無官職、衣冠仕洛陽。三子俱入室、室中自生光。大婦織綺紵、中婦織流黄。小婦無所為、挾琴上高堂(大子は二千石、中子は孝廉郎。小子は官職無きも、衣冠して洛陽に仕ふ。三子俱に室に入らば、室中自ら光を生ず。大婦は綺紵を織り、中婦は流黄を織る。小婦は為す所無く、琴を挾みて高堂に上る)」とある。「長安有狹斜行」について余冠英は『樂府詩選』(人民文学出版社 一九五三)で「本篇与『相逢行』同一母題、似是一曲之異辭、而『相逢行』以這篇為藍本。

篇末六句成一個套子、被後人摘取模倣、題為『三婦艶』。(この詩は『相逢行』と主題を同じくしており、同じ樂曲の異なる歌辭であつて、『相逢行』がこの詩をモデルとしたようである。篇末の六句は常套句を成しており、後人に取り上げて模倣され、『三婦艶』と題された。)とある。「長安有狹斜行」「相逢行」「三婦艶」に現れる「小婦」については、大村和人「『巫』から『小婦』へ―樂府『三婦艶』の小婦について―(『日本中国学会報』五七 二〇〇五)に論じられている。

「執袴」薄絹のズボン。貴族の子弟が着用した。『漢書』叙伝上に「数年、金華之業絶、出与王・許子弟為群、在於綺襦執袴之間、非其好也。(数年、金華の業絶え、出でて王・許の子弟と群れを為し、綺襦執袴の間に在るも、其の好に非ざるなり。)」とあり、顔師古注に「執、素也。綺、今細綾也。並貴戚子弟之服。(執、素なり。綺、今の細綾なり。並びに貴戚子弟の服なり。)」と。袴は袴の別体。

7 欲知別家久 8 戎衣今已故

「欲知」お知りになりたければ。歌い手が聴衆に語り掛ける言葉。齊・王融「有所思」に「欲知憂能老、為視鏡中糸(憂ひの能く老いしむるを知らんと欲せば、為に視よ鏡中の糸を)」とある。

「戎衣」軍服。『春秋左氏伝』襄公二十五年に「鄭子産献捷於晋、戎服将事。(鄭の子産捷ちを晋に献

じ、戎服して事を將ふ。」とあり、杜預の注に「戎服、軍旅之衣、異於朝服。（戎服、軍旅の衣にして、朝服と異なる。）」と。

「已故」もう古びてしまった。晋・曹毗「正朝詩」に「佳袍忽已故、今載奄復初（佳袍 忽ち已に故く、今載 奄ち初に復す）」と。

陳・江総「隴頭水」二首其一

【本文及び書き下し】

- | | |
|---------|--------------|
| 1 隴頭万里外 | 隴頭 万里の外 |
| 2 天崖四面絶 | 天崖 四面 絶す |
| 3 人将蓬共転 | 人 蓬と共に転じ |
| 4 水与啼俱咽 | 水 啼と共に咽ぶ |
| 5 驚湍自湧沸 | 驚湍 自ら湧沸し |
| 6 古樹多摧折 | 古樹 多く摧折す |
| 7 伝聞博望侯 | 伝聞す 博望侯の |
| 8 苦辛提漢節 | 苦辛して 漢節を提ぐるを |

【日本語訳】

- 1 隴山は都から万里のまたその向こう
- 2 この世の果ては四方が切り立った崖になっている
- 3 人はヨモギといっしょに転がり転がって
- 4 流れ下る水は鳥や獣の鳴き声とともに咽び泣く
- 5 川の早瀬はひとりでに水が湧き上がり
- 6 辺りの古びた樹木はほとんどが折れ砕かれている
- 7 聞くところでは、博望侯張騫は

8 辛い目に合いながらも漢の符節をなくすことがなかったとか

【校勘】

○『文苑英華』卷百九十八・『古詩紀』卷百十四
8 「提」、「英華」作「持」、注云「一作『題』」。

【押韻】

「絶」「折」、入声十七薛韻。「咽」「節」、入声十六屑韻。節・薛同用。

【作者】五一九～五九四。六朝後期の文人。梁・陳・隋に仕えた。字は総持。済陽郡考城（河南省蘭考県）の人。名門に生まれ、十八歳で武陵王蕭紀の法曹参军として初めて出仕した。後、梁の武帝にその詩才を高く評価された。太清二（五四八）年、徐陵とともに東魏への使者に扱われたが、病氣を理由に辞退した。間もなく侯景の乱が起こり都建康が陥落すると、江総は会稽へ、さらに嶺南へと難を避け、以後十数年を広州で過ごした。陳の天嘉四（五六三）年、文帝により中書侍郎として召還され、文帝、宣帝に仕えた。五八三年、後主が即位すると江総はその信任を得て高官を歴任し、至徳四（五八六）年には尚書令（宰相）となった。江総は宰相の位にあつても政治に関与せず、後主と日夜酒宴を張り詩文を作つて楽しむばかりで、陳後主の「狎客」とされ、亡国の一因となったことを批判

される。禎明三（五八九）年、隋が陳を滅ぼすと、隋に仕え上開府となり、開皇十四（五九二）年に卒した。江総は亡国の臣としてその政治姿勢を非難されることが多いが、宮廷詩人として活躍し、艶麗な作風が大いにもてはやされた。一方、熱心な仏教信者であつたため、山中の仏寺を訪れた際の作品をいくつか残しており、そこには優れた山水描写が見られる。今、百首あまりが伝わる。

【語釈】

1 隴頭万里外 2 天崖四面絶

「万里外」辺境の地をいう。晋・陸機「贈顧交趾公真」詩（『文選』卷二十四）に「伐鼓五嶺表、揚旌万里外（鼓を五嶺の表に伐ち、旌を万里の外に揚ぐ）」とあり、李善注は『漢書』陳湯伝を引き「劉向上疏曰、『甘延寿懸旌万里之外』（劉向 上疏して曰く、『甘延寿 旌を万里の外に懸く』と。）という。

「天崖」天涯とも。この世の果て。「古詩十九首」（『文選』卷二十九）其一に「相去万余里、各在天一涯（相ひ去ること 万余里、各おの天の一涯に在り）」。

「四面絶」四方が切り立った崖になっている。晋・張載「叙行賦」（『芸文類聚』卷二十七）に「縁阻岑之絶崖、蹈偏梁之懸閣。（岑を阻むの絶崖に縁り、偏梁の懸閣を蹈む。）」。

3 人将蓬共転 4 水与啼俱咽

「人将蓬」人とヨモギと。将は並列を表す「与」と同じ用法。梁・庾肩吾「経陳思王墓詩」に「鴈与雲俱陣、沙将蓬共驚（鴈 雲と共に陣なり、沙 蓬と共に驚く）」。

「啼」鳥や獣の鳴き声。

5 驚湍自湧沸 6 古樹多摧折

「驚湍」早瀬、急流。晋・潘岳「河陽県作詩」二首（『文選』卷二十六）其二に「川氣冒山嶺、驚湍激巖阿（川氣 山嶺を冒し、驚湍 巖阿に激す）」。

「湧沸」湧沸とも。水が湧き上がる。魏文帝曹丕「滄海賦」（『芸文類聚』卷八）に「鏗訇隱隣、涌沸凌邁（鏗訇 隱隣として、涌沸 凌邁たり。）。六朝詩では他の用例は見当たらない。

「古樹」宋・鮑照「登大雷岸与妹書」に「寒蓬夕卷、古樹雲平。（寒蓬 夕べに巻き、古樹 雲 平らかなり。）」と見えるが、詩に現るのは梁代以降のようである。

「摧折」くだけ折れる。魏・阮籍「詠懷」八十二首其七十九に「不見季秋草、摧折在今時（見ずや 季秋の草の、摧折して 今時に在るを）」。

7 伝聞博望侯 8 苦辛提漢節

「伝聞」聞く所によると。宋・王微「雜詩」二首（『玉台』卷三）其一「伝聞兵失利、不見来帰者（伝聞す 兵 利を失ひ、来たり帰る者を見ずと）」。

「博望侯」張騫（？～前一一四）。月氏との匈奴挾撃を圖った武帝に応じ、使者として前一三九年頃長安を出発したが、途中匈奴の捕虜となり、約十年の間そのまま抑留された。脱出して大宛（フェルガナ）に至るが、月氏との同盟は成らなかった。帰国の途中、またも匈奴に捕らえられたが、内乱に乗じて前一二六年に帰国した。前一二三年、大將軍衛青の遠征軍に従い、その功で博望侯に封じられた。

「苦辛」苦勞。「古詩十九首」（『文選』卷二十九）其四に「無為守窮賤、輒軻長苦辛（為す無かれ 窮賤を守り、輒軻して 長く苦辛するを）」。

「漢節」漢の使者としての割り符。『史記』大宛列伝に「留騫十余歳、与妻、有子。然騫持漢節不失。（騫を留むること 十余歳、妻を与へ、子有り。然れども騫 漢節を持して失はず。）」と見える故事に拠る。『漢書』張騫伝にも同様の記事がある。梁武帝蕭衍「代蘇属国婦詩」（『玉台』卷七）に「胡羊久剽奪、漢節故支持（胡羊 久しく剽奪せられ、漢節故に支持す）」とあるが、こちらは蘇武の故事。

陳・江総「隴頭水」二首其二

【本文及び書き下し】

- 1 霧暗山中日 霧は暗し 山中の日
- 2 風驚隴上秋 風は驚く 隴上の秋
- 3 徒傷幽咽響 徒らに傷む 幽咽の響き
- 4 不見東西流 見ずや 東西に流るるを

【語釈】

1 霧暗山中日 2 風驚隴上秋

「霧暗」霧のために辺りが暗くなる。梁簡文帝蕭綱「艷歌篇十八韻」（『玉台』卷七）に「霧暗窗前柳、寒疏井上桐（霧は暗し 窗前の柳、寒に疏なり 井上の桐）」。

「風驚」風がサツと吹いて来る。驚風の語は魏文帝曹丕「芙蓉池作詩」（『文選』卷二十七）に「驚風扶輪轂、飛鳥翔我前（驚風 輪轂を扶け、飛鳥 我が前を翔ける）」と見えるが、風驚は梁・沈約「詠雪應令詩」には「夜雪合且離、曉風驚復息（夜雪 合ひて且つ離れ、曉風 驚きて復た息む）」が早い例のようである。向島成美氏『漢詩のことば』（大修館書店 一九九八）「漢魏六朝詩の『驚』について」に詳しい。

3 徒傷幽咽響 4 不見東西流

「徒傷」無駄だと分かっているが心を痛める。梁・柳惲「擣衣詩」五章（『玉台』卷五）其一に「不怨飛蓬苦、徒傷蕙草殘（怨まず 飛蓬の苦しきを、徒らに傷む 蕙草の残はるるを）」。

「幽咽」隴山から流れ下る川の咽び泣くような音。謝靈運「隴頭水」の「隴阪」語釈参照。

「東西流」隴山から流れる川の水は東に流れるものは東に流れ、西に流れるものは西に流れて、二度と会うことがない。漢・無名氏「白頭吟」古辭（『玉台』

- 5 無期從此別 期無し 此よりの別
- 6 更度幾年幽 更に幾年の幽を度らん
- 7 遙聞玉関道 遙かに聞く 玉関の道
- 8 望入杳悠悠 入りて 杳として悠悠たるを望む

【日本語訳】

- 1 山がちの地では昼間でも霧のために暗く
- 2 隴山の秋は風がサーッと吹き過ぎていきます
- 3 川の咽び泣くような音をいたずらに悲しんでおいでだ
- 4 東にまた西に流れていく川の流れをご覧なさい
- 5 ここで別れ別れになれば、二度と会うこともなく
- 6 これから先、いったいどれほどの薄暗い歳月を送ることになりましょう
- 7 玉門関に至る道からも流れの音が聞こえて来ますし
- 8 川が遠く遙かな地に流れ込むのを眺められます

【校勘】

○『文苑英華』卷百九十八・「古詩紀」卷百十四

- 1 「山」、「英華」作「川」。
- 8 「入」、「英華」作「人」。

【押韻】

「秋」「流」、下平十八尤韻。「幽」「悠」、下平二十幽韻。尤・幽同用。

卷一に「蹀躞御溝上、溝水東西流（蹀躞たり 御溝の上、溝水 東西に流る）」。

5 無期從此別 6 更度幾年幽

「無期」再会の時がない。漢・無名氏「古詩」五首（『玉台』卷一、作枚乗「雜詩」九首）其五に「美人在雲端、天路隔無期（美人 雲端に在り、天路 隔たりて 期無し）」。

「從此別」今この時、ここで別れたならば。漢・李陵「与蘇武三首」（『文選』卷二十九）其一に「長當從此別、且復立斯須（長く当に此れより別るべし、且く復た立ちて斯須す）」とあり、江総「関山月」には「無期從此別、復欲幾年行（期無し 此れよりの別れ、復た幾年の行ならんと欲するか）」との類似句が見られる。

「幾年幽」隴山で過ごす歲月。幽、薄暗い様。第1・2句「霧暗山中日、風驚隴上秋」を承ける。

7 遙聞玉関道 8 望入杳悠悠

「遙聞」遙か彼方から聞こえてくる。北周・王褒「燕歌行」に「遙聞陌頭採桑曲、猶勝辺地胡笳声（遙かに聞く 陌頭 採桑の曲、猶ほ勝る 辺地 胡笳の声）」。

「玉関」玉門関。甘肅省敦煌市の北西。梁元帝蕭繹「驄馬驅」に「試上金微山、還看玉関路（試みに上る 金微山、還た看る 玉関の路）」。

「杳悠悠」遠くおぼろげな様。宋・鮑照「松柏篇」に
「大暮杳悠悠、長夜無時節（大暮 杳として悠悠た
り、長夜 時節無し）」。

※本稿は平成二十七年科学研究費基盤研究（○）「言語実験
の場としての六朝楽府に関する研究」（課題番号二六三七
〇四一〇）の助成を受けたものである。